

The Futaka Spirit

(現教日より第1号)

つ組 縦割り創造活動

活動名「もっと輝け、栗林公園！」

指導者 山地 正樹 先生

縦割り学級内のふわっとした空気、子どもたちの笑顔など、学級内に和やかな空気が溢れていました。1年生が語ろうとする姿をじっと待ち続ける子どもたちの姿も印象的で、喜びも悲しみも分かち合い、共に伸びていこうとする山地先生の学級づくりのスタンスが見えた1時間でした。これから先、子どもたちが栗林公園というフィールドに何を感じ、どう変えていこうと考えるのか楽しみです。

3年 学級創造活動

活動名「みんなが楽しめる活動」

指導者 堀場 規朗 先生

今年度初めての学級創造活動の提案でした。子ども一人一人の個性を大切にする堀場学級ならではの、受容的で優しい雰囲気が見られました。年度初めの提案でありながら、子どもが生き生きと語り自信をもって活動する姿に、本校の創造活動の可能性を改めて感じました。また、この時期でありながら、年間の重点を全て踏まえた魂の提案資料にも頭が下がりました。

5年 学級創造活動

活動名「“個人追究”って？」

指導者 仲西 長代 先生

こちらも、今年度初めての学級創造活動の提案でした。学級創造活動の内容の要件について、切実感をもって懸命に語る子どもたち。それぞれの立場から語り合い、何とかして着地点を見出そうとする子どもの言葉が止まらない25分間でした。また、これまでの子どもの姿を真摯に見てきたことがわかる教師のつなぎや発問に、教師としてあるべき姿を見せて頂きました。

運動会直後という大変なスケジュールの中、魂の提案をして下さった3人の先生方に心から拍手を送りたいと思います。山地先生、堀場先生、仲西先生、貴重なご提案をありがとうございました。

本年度より、毎回提案者からのコメントを頂きます。実践を通して改めて見えたこと、また逆に、実践してみたからこそ新たに生まれた問いなど、提案者自らによる“自分にとって意味のある知”を掲載します。もがき、苦しみ、悩みながらも最後までやり切り、魂を込め続けた実践者だからこそ言える言葉に、我々も学んでいきたいと思っています。一年間、どうぞよろしくお願い致します。

(文責 橘 慎二郎)

【山地先生コメント】

普段見られない「プロジェクトのテーマを設定するための時間」を見て意見を頂けたことを嬉しく思いました。自分は子どもが価値を見出す1年間で過ごすためには、教師がテーマの要件やプロジェクトの計画について見通しをもっておくことが不可欠だと感じました。教師の思いと子どもの思いをどうつなぐかが、これからさらに求められると思います。

また、1～6年生の交流では、具体物を用いることで対話が成立することも見えてきたと思います。

【堀場先生コメント】

本校は意欲・関心でなく、主体的、共感的・協同的な態度を大切にしている。特に主体とは、与えられたことを一生懸命行うのだけでなく、与えられていない問いまで自分で見つけ出す態度だと考える。

主体的に活動する子どもは目的が自分なりに落ちた時にでる姿だと思った。黙々とやりたいことを行える子どもはその先が見えている。逆に活動内容にこだわりのない子は、先のことが明確でない。創造活動の目的と子どもが考える目的をすり合わせる事が教師の仕事だと感じた。

【仲西先生コメント】

提案授業後、さらに話し合い「自分が成長できる」「長く続けられる」「誰か(友達、家族、学校、地域…)の役に立つ」という要件を出すことができた。「だれかの役に立つ」ということがまだ受け入れ切れていない子どもも実際にいる。これだけ話し合っで見出した内容の要件は、テーマを決めるためだけに使うのではなく、これからの追究活動を子どもが振り返るときの視点として使うことができる。5赤学級創造のものさしと考えてもいいのかなと感じ始めている。実感を伴った要件は年間を通じて使えるものとなりそうである。

山地実践【つ組 縦割り創造活動】

～ もっと輝け、栗林公園！ ～



本実践の主張点

見方・考え方を育むために、

提案1 内容設定のしかけの要件を探る。

提案2 即時的評価と事後の自他評価を併用しながら支援する。

内容設定のしかけの要件について

山地提案では、創造活動の内容設定の段階においては、教師の意図的な働きかけが重要であると述べられている。1年間という限られた時間内で、異年齢集団の子どもが自ら活動し、価値の創造につながる見方・考え方を育ていけるようにするためには、年間の活動における教師の見通しと、対象に関わる深い教材研究が必要であるという提案である。ここでは、これまでに共通理解されてきた内容設定の4つの要件に加え、新たに「自分達にしかできない強みを感じられる」という要件の必要性について提案がなされた。これについて、以下に具体を述べる。

○ 自分達にしかできない強みを感じられる

自己決定理論では、人が3つの基本的な心理的欲求をもっていることが仮定されている。その3つとは、「関係性」「有能さ」「自律性」への欲求である。子どもたちが自己の活動において、自分達にしかできない強みを感じることは、有能さをくすぐることであり、同時に、教師が子どもに委ねられる幅が広がることで、子どものやる気につながっていくという主張である。要件について考える際に大切にしたいのは、個の文脈を置き去りにしない、ということである。いくらその要件が集団にとって確からしいものでも、それが個の思いや願いとずれたものになっていては、子どもの主体性には到底つながらない。集団でのプロジェクトを充実させるためには、その集団に所属する個の文脈をそれぞれ大切にしながら、問題解決を進めていくことが必要である。

本時、子どもたちはグループでお気に入りの写真を1枚選ぶという活動を通して、個々のこだわりを表出しながら話し合いを進めていった。教師はそういったこだわりを評価しつつ、子どもの語りに耳を傾け、押し付けにならないようにやんわりと言葉を返していた。そうした教師の関わりにより、子どもは自らの選択に自信をもち、新たな活動への期待を高めていくことができていた。具体的な操作の場面があったからこそ異学年での豊かな関わり合いが生まれ、活動を繰り返しながら問題解決の質を高めていこうとする子どもの姿につながったのだと考える。

支援につながる評価の在り方について

ここでは主に2つの評価方法が示された。1つは教師による即時的評価、もう1つは事後の自他評価である。

○ 即時的評価について

即時的評価では、子どもの発言や行動をもとに、個々の見方・考え方を評価する。その際、子どもにとって価値があると判断できる場合は、その場で称賛し、全体に広げるようにする。本時においてもこのような教師による即時的評価の場面は数多く見られていた。

○ 事後の自己評価について

教師が見落としがちな個々の評価を可能にするのが、事後の自他評価である、という提案である。プロジェクトの進行や自他の成長についてメタ認知できるようになれば、こどは次に何をしたいか、どうなりたいかといったことについて見通しがもてるようになる。本提案では、子どもがノートに表現する内容は、①プロジェクト進行のために自分が頑張ったこと、②次にしたいこと、③関わった人の良かったところ、の3点で共通理解されていた。つ組では毎回、創造活動の初めの時間は、この他者評価を発表するようにしておくということだった。これにより、誰かが見つけた良さを共有したり認知したりできるようにすることがねらいである。年間を通して繰り返す行うことで、見方・考え方を育むことにつながることを期待したい。

成果と課題

- 本時の終末には、ほとんどの子どもたちが次回の活動に対する意欲をもつことができていた。単元全体を見通し、早い段階から授業づくりのしかけを行っておくことで、教師の意図性に縛られすぎない、子ども発のテーマ設定にもっていくことが可能であるといえる。
- △ 討議の中で、内容や方法の見通しが、低学年の子どもの実態に合っていないのではないかと指摘が寄せられた。6学年で関わるよさを生かし、様々な発達段階の子どもの文脈を大切にしながら活動を進めていく必要がある。

仲西実践【第5学年 学級創造活動】

～「個人追究」って？～



本実践の主張点

学級創造活動において、思いや願いを叶える探究活動にするために、魅力ある共通体験を設定することを通して…

提案1 子どもが内容の要件を実感を伴って見出せるようにする。

提案2 子どもが自分の変容を自覚することができるようにする。

学級創造活動における共通体験について

1 共通体験設定の意義

一口に「追究」と言っても、子どもによってそのイメージはそれぞれ異なる。まして、5年生という段階においては、それまでの各学級の構成メンバーや教師の個性が大きく影響してきているため、その差が生まれるのはある意味必然である。そこで、本提案では、新たな集団独自の文化をつくりつつ、共通の土台をもちながら個人追究に取り組んでいくことができるよう、課題設定の前段階として共通体験の場を設定していくことが提案された。ここでは、共通体験を通しての気づきを互いに伝え合う場面を大切にしている。感じたことを素直に本音で伝え合うことで、友達の見方を面白いと感じたり、自分の見方を変えていきたいと考えたりすることを期待する。多様な見方ができることが「調べてみたい」「不思議だな」と感じることのきっかけとなり、よりよいテーマ設定につながるという主張である。さらに多様な見方ができることは、テーマ設定に限らず、今後問題を解決していく上で、解決の方法を吟味する場面や新たな問題を見出す場面などにも役立つ。「ひと・もの・こと」に対して多様な見方をして、豊かに感受できることが「学び続ける力」「関わる力」「創造する力」を育てていくことにつながるのではないだろうか。

2 魅力ある共通体験とは

① 多様な見方・考え方ができる可能性があるもの。

② 作業工程にはっきりとした違いがあるなど、子どもにとって分かりやすいステップがあるもの。

上記の2点を踏まえ、本提案では伝統工芸士に学びながら「高松張子」の1つである「奉公さん」という人形を全員で作成した。この共通体験を踏まえた上で、以下の2点に迫ろうとした。

子ども自身による内容の要件の設定

本時では、子ども自身が学級創造活動の内容の要件について考え、吟味していく話し合いが行われた。その中でも議論の中心となったのが、「役に立つ」という要件の是非についてであった。ここでは、自分の成長につなげたい、有意義な活動がしたいという願いから「役に立つ」ことを肯定する子どもと、「役に立つ」ことの大切さを感じつつも、それを肯定することで自分が思い描く活動ができなくなるという不安から、別の要件に重点を置くとする子どもとの間で対立軸が生じ、活発な話し合いとなった。ここで考えたのは、内容の要件づくりと内容決定の順序性についてである。本来であれば要件が先に出され、その要件の中から内容を考えていくことが一般的であると思われる。しかしながら5年生の段階においては、昨年度までの学級創造の経験から、多くの子どもが既に本年度のイメージをもっており、本学級でも同様であった。そこで本時は、子どもが希望する内容が先にあり、その上で要件についての話し合いが行われていた。これは学年が上がれば上がるほど、創造活動の経験年数が増えれば増えるほど当然起こりうることであり、想定しておくべきことである。本時においての子どもたちの語りは切実味を帯びており、内容の要件を教師が与えるのを待つのではなく、本気で自分達の手で共通理解しておきたいという気持ちが見て取れた。魅力ある共通体験の中で感じ考えた経験や、思い描く内容が先にあったからこそその姿であったと考えられる。

一年間という長いスパンにおいて子どもが追究意欲を継続していけるようにするためには、子ども自身が内容の要件をしっかりと吟味し、共通理解しておくことには意味がある。形式に気を取られて内容設定を焦るのではなく、常に子どもたちの目線に立ち、あくまで子どもたちの文脈を大切にしていける仲西実践から、教師の「待ち」の姿勢の大切さを改めて学ぶことができた。これは、縦割り創造活動においても教科学習においても大切にしたい教師のスタンスの一つではないだろうか。

成果と課題

○ 学級創造活動においては子どもがしたい内容を大切にするからこそ、内容の要件についての吟味においても本音が見え、議論が活性化する。今後も、教師の意図性や見通しをもちつつも、子どもの文脈を大切にしていけることを基本としたい。

△ 25分という短い時間の中で、本提案の主張をどのように伝えていくのが難しい。網羅的に見せることは難しいため、提案の重点を焦点化しておく必要がある。

堀場実践【第3学年 学級創造活動】

～ みんなが楽しめる活動 ～



本実践の主張点

学級創造活動において、思いや願いを叶える探究活動にするために、

提案1 4つの場面に適した支援・環境づくりを行う。

提案2 具体化された見方・考え方を基にした子どもの姿を見て取り支援に生かす。

本実践の創造活動提案の方向性

- 1 **ねらいに迫るための支援の在り方の検証**
 - ① 学級創造活動における内容の要件及び子どもなりの活動の要件について
 - ② 価値の認知モデルや方法の要件について
 - ③ 45分、25分の2つの学級創造活動の在り方について
 - ④ 発達の段階や学年間での系統的なつながりについて
- 2 **ねらいに迫るための子どもの見取り方・評価の在り方の検証**
 - ① 子どもの姿の見取り方について
 - ② 表現物の評価の仕方について
 - ③ 子ども自身の自己評価の在り方について
- 3 **学級創造活動と縦割り創造活動の有機的なつながりの検証**

4つの場面に適した支援・環境づくり

○ 6年間での教師の関わり

創造活動は「発達の道筋」に象徴されるように、個人での成長の段階を重視している領域ではあるが、ある程度学びの質と支援の系統性をもつことで、その子が創造した価値とその過程での見方・考え方を育むことにつながる。ここでは、「成長のものさし」を参考にしながら、創造活動の目的の共有の仕方については上・下学年の2段階に、活動の内容の方向性については低・中・高学年の3段階に、支援や環境づくりについては各年齢ごとに想定していくことが提案された。いずれにしても各学年で断片的に支援していくのではなく、6学年を見据えた効果的な支援や環境づくりを心がけることが大切であるといえる。

○ 1年間での教師の関わり

年間の支援の中でも、特に「気付き」や「願い」の場面での教師の関わりは極めて重要である。「気付き」の時期においては、①創造活動の目的を共有する。②自分自身や自分を取り巻く「ひと・もの・こと」と向かい合う。③自分なりに見通しをもった時点で教師と相談する。といったステップが、「願い」の段階では、④お試しの期間を取り、簡単な表現物などを作成し、仲間から感想や意見をもらう。⑤活動内容の修正・変更を行い、課題の決定をする。といったステップが必要である。環境を整え適切な支援を行っていくことで、価値を創造する過程での見方・考え方を育むことができるといえる。

具体化された見方・考え方を基にした支援・環境づくり

○ 教師によるエピソード記録

エピソード記録を積み上げる時間的な余裕を確保していくために、記録は以下の3場面に絞る。

- ・ 活動の区切りや転換期、成功・失敗した場合
- ・ 見落とししていたり、長い期間見取れていなかった場合
- ・ 問題の原因を検証できた場合

○ 活動の区切りで行う振り返り（表現物）

活動の区切りになる機会にそれまでの取り組みをまとめる作業を習慣化することで、活動に対する内省や今後の見通しをもてるようにする。

○ 子ども同士の評価

教室掲示などを利用して全員の取り組みを一覧で見ることができるようしておくことで、全員が他者からの評価を得られる機会を保障する。

成果と課題

- 特定の項目ではなく、創造活動の支援と評価全般に関わる網羅的な提案であった。各発達段階及び場面別の支援と評価の在り方が具体的に示されたことで、今後の焦点化された提案につながっていくことが考えられる。
- 本時では、自分とは異なる課題の友達のパフォーマンスを共感的に見守り、応援しようとする温かい学級風土が見られた。支持的風土の構築がカリキュラムの基盤となることを改めて感じることができた。
- △ 25分という時間の中で、どの部分を焦点化して見せるのか、検討していく必要がある。